

学力とは何を意味することばか

センター協力研究員（東京大学教育学部附属中等教育学校教諭） 村石 幸正

高い学力を身につける（させる）ことは、生徒の、そして学校教育の目標の一つであるばかりでなく、すべての親と教師の願いでもある。しかし一口に学力といっても、立場によってその意味するところはずいぶん違うのではないかと思われる。

親の立場での子どもに身につけさせたい学力とは、少しでもよい^[YM1]学校に入り、その子どもの人生が少しでも有利になるようになるための「試験を突破するための能力」であることが少なくない^[YM2]。

それに対し、教師の立場での学力とは、どのようなものなのだろうか。教員間での会話の中で、「あいつはやればできるのに…」「あの子は切れる」「あの子はよくわかっている」などという言葉で生徒の持つ能力を表すことがある。このような表現で表される能力をさす場合、知識の量はあまり問題視されないことが多いように思える。

生徒の中には、「できる」「切れる」と言われることはないがよく努力をしてテストで高い得点をとる子供もいる。しかし、そのような子は高い学力を身につけたと「評定」されることはするが、高い学力を身につけていると「評価」されることはあまりないのではないだろうか^[村石3]。

では、学力が低下していると声高に叫ばれている、その学力とは、どのようなものなのだろうか。

広井禎氏（前筑波大学附属高等学校副校長）は、

比較的良く勉強して、第一志望の大学に入学していくような学生でも知的関心が低いのではないかと
言われ始めたのは、10年以上前である。彼らは、大学の講義もあまりサボらず、受講態度も悪くなく、試験も出来る。しかし、熱意が感じられない。物知りではあるが単にそれだけではないか、意欲が育っていないのではないかと、言うのである。

（新しい世紀の放射線教育 ―放射線教育フォーラム2000年度の活動と今後の展開― 第3章 第3節 「総合的な学習の時間」のエネルギー・環境教育への活用）

質問されると「習ってません」と答える。その程度のことを知らなかったのを恥ずかしいと思ったり、

関連の本を探したりはしない。勉強するといっても、試験に出ることに限られる傾向にあり、納得いかないといつては何冊もの本を広げるなどということは少なくなった。確かに物知りではあるが、単にそれだけではないか。

かつては、大学生であるということは、知識が多いと思われていたが、それだけではなく、人格についても、判断力についても、水準以上であると思われる、その期待に応える活躍もしていた者がいた。後者の人格や判断力に疑問符がつくようになった。未知のことを理解したい、難しいことをやり遂げたいという、意欲が感じられない傾向になってきている。

平成13年度 原子力体験セミナー 名古屋地区 テキスト
と述べておられる。

学校教育で生徒に身につけさせるべき学力とは、どのようなものなのだろうか。広井氏が上記の文章で述べておられる内容は、直接的には「意欲・関心・態度」に関してのこととなるであろうが、ある意味での学力とも呼べるものではあろう。例えばそれを広い意味での学力と呼んだとすると、学力低下が叫ばれていると言われたときの学力はもっと狭い意味でのものなのだろうか。もし、狭い意味での学力であるならば、学校での授業時数を増やせば、あるいは学習指導要領の内容を増やせばよいものなのだろうか。

学校教育では、児童・生徒に学習させるべき項目が明示されている。その学習させるべき項目の定着度が低いということだけが学力低下問題ではないと感じている。

今回の学校臨床総合教育研究センターでの学力問題プロジェクトが学力問題のどのような部分を明らかにしていくことができるのか、現場の一教員として、その過程に参加できることは望外の幸せである。

[YM1]（偏差値の高い？）

[YM2] この意味で、一昔前のいわゆるペーパーテストの得点能力を学力ととらえている親は、もうあまりいないのではないかと思われる。総合的な学習が始まった今、社会が望んでいる学力と

いうものを

[村石3] たとえ文部科学省や教育学者がどのようなことを言おうと、多くの場合、教師は「学力」を、

「(覚えるのではなく) 理解する能力」, 「(今自分が課されている) 問題を適確に把握・処理する能力」と捉えているのではないかと思われる。